

塗り絵と色彩教育に関する一考察

A Study on Coloring Book and Color Education

小川 直茂

OGAWA Naoshige

Abstract

Today, "coloring books" are widely used as toys that can be enjoyed by all generations. In the Meiji era, coloring books were originally used as teaching materials for drawing education. However, since the 1940s, many negative opinions have been expressed about coloring books. For the reason, coloring books are now rarely used in educational settings. I worked on this study with the aim of organizing historical information about coloring books and education and reassessing the educational value of coloring books. As a result of my research, I thought it was important to think of educational methods to make effective use of the properties of coloring books. In addition, I have shown the potential of coloring books using in higher education in design.

Keywords : 塗り絵、色彩教育

1. はじめに

現代において「塗り絵」は、幼年時より楽しむことができる玩具として広く知られている。塗り絵と聞いて一般的に連想される対象は幼児や児童だが、近年では図案の細密度を増して難易度や完成時の絵画的品質を高めた大人向けの塗り絵も登場している。大人向けの塗り絵は2005年末頃から市場において注目を集め、その後ブームとなって出版市場や関連する文具市場を牽引するに至った[注1]。2015年頃には認知症の予防効果を複数のメディアが取り上げるなどしてさらにブームが加熱し[注2]、現在に至ってもその人気は衰える様子は見られない。このように塗り絵は、子どもだけでなく大人を含む幅広い年齢層を対象とした玩具として定着している。

塗り絵が玩具として広がるようになったきっかけとしては、明治時代後期に行われた懸賞としての塗り絵作品の応募や、大正時代より始まった塗り絵帳の販売などが挙げられる[注3]。さらに遡ると、明治時代の学校教育で「絵手本」と呼ばれる図画教育の教材に色を塗る教育が行われており、これが塗り絵の源流になったといわれている[注3]。

このように、元々塗り絵は教育のための教材といった性質を備えていたのだが、現代では玩具としての認知度の高さに比して教育場面で塗り絵が用いられる事例は非

常に少ない。また、塗り絵に関する調査研究事例や文献も多いとはいえ、教育・研究分野において塗り絵に対する注目度の低い状況が長期間にわたって続いてきた。

本稿では、既往研究および文献調査にもとづいて塗り絵と教育に関する歴史的推移を概観すると共に、その内容について分析する。さらに、既往研究で触れられてこなかった「高等教育における塗り絵の活用」について考察を行い、塗り絵の教育的価値についての情報を整理すると共に新たな知見を得ることを目的とする。

2. 塗り絵と教育に関する歴史的推移

明治時代の図画教育の根幹には、手本の内容を忠実に写し取る「臨画」のスタンスが存在していた。辻[注4]は、「明治時代の初期は、西洋の先進国の文化や科学技術を取り入れること、すなわち近代化がわが国の教育の目標であった。」「当時は、写真や印刷技術が普及していなかったため、対象を正確に描写することが産業の振興や日常生活に求められた。」と記しており、臨画教育が国の教育方針としても重要なものとして位置づけられていたことが分かる。

臨画教育は手本の正確な描写に重点が置かれ、技術的な側面での教育的効果は認められるものの、制作者の個性や創造性を重視する教育には向いていない。このよう

な教育方針に対する疑念や不満が、教育現場において徐々に高まっていったものと思われる。蜂谷〔注5〕は明治40年代に制作された約600点の図画作品を分析して、明治後期の図画教育で表現の応用を許容するような実践が行われていたと報告しており、これもそうした意識のあらわれであると読み解くことができそうである。また、根山〔注6, 7〕は北海道における大正時代前期の図画教育について調査を行い、当時臨画を軸とする図画教育について問題視する論文が複数投稿されていたことを紹介している。

大正時代後期になると、臨画を基本とした図画教育のあり方に疑問を抱く風潮が拡大し、図画教育が大きな転換点を迎える。版画家・洋画家である山本鼎（かなえ）は、大正7年に長野県の神川小学校で「児童自由画の奨励」の講演を行い、これをきっかけとして図画教育において自由な作風を推進する「自由画教育運動」の旗手となった。その後、自由画教育に対する賛同は大正デモクラシーの流れを受けて急速に全国に広がっていき、昭和初期に川喜田煉七郎らによって提唱された構成教育が登場するまでの間、自由画教育は図画教育の主流となった〔注8〕。

このような、図画教育において自由な制作を重んじる風潮が、教育現場における塗り絵の見方や取り扱いにも大きな影響を及ぼしたものと推察される。1940年代以降、塗り絵が備える「あらかじめ描かれた図案の輪郭線にもとづいて色を塗る」という性質を「自由な発想や表現を阻害する要因」として否定的に受け止める見解が、複数の美術教育者から示されるようになった。金子・山本は『ぬりえ文化』において、美術教育者の湯川尚文が1942年に著書で、教育学者の霜田静志が1953年に雑誌への寄稿で発表した塗り絵批判を紹介している〔注9〕。この他にも美術評論家の外山卯三郎〔注10〕、美術教育者の那須田茂〔注11〕などが著書で同様の批判を展開している。また、初田〔注12〕は、ローウェンフェルド／チゼック／ディ・レオなど海外の美術教育研究者による塗り絵批判が、国内の塗り絵に対する否定的見解に少なからぬ影響を及ぼしたと述べている。

以上のような、塗り絵の教育効果に対する否定的見解の影響を受けて、教育場面において塗り絵を使用する事例は著しく減少し、同時に研究対象としても軽視される状況が長く続くこととなった。

しかし近年、塗り絵の価値を見直そうとする兆しが少しずつあらわれている。小田〔注13〕は、塗り絵に対する否定的見解の定着に影響を与えたローウェンフェルドの主張が、必ずしも客観的に信頼できる実験結果とはいえないことを指摘している。また鈴木〔注14, 15〕は、

従来の美術教育で重視されてきた個性／自己表現／創造性とは異なる軸として「丁寧さ」「集中力」といった新たな教育的視点を示し、それらの能力獲得における塗り絵活用の可能性について検討を行っている。

3. 塗り絵の教育効果に対する否定的見解の分析

あらかじめ描かれた図案の輪郭線にもとづいて色を塗るという塗り絵の性質そのものが、作品表現における創造性に悪影響を与えるとの見解が、塗り絵批判の主旨であることは既に述べた。この内容を更に掘り下げると、塗り絵が創造性に与える影響を（1）輪郭線にもとづいて塗る「彩色方式」が与える影響（2）描かれた「図案の内容」が与える影響の2つに分けることができる。本章では、これら2つの観点を軸に、既往研究の内容および筆者の考察を交えて、塗り絵の教育効果に対する否定的見解について分析を行う。

3.1. 輪郭線にもとづいて塗る「彩色方式」が与える影響

塗り絵の「彩色方式」を否定的に捉える思考は、輪郭線にもとづいた塗りを「正解（あるいは成功）」、そうでない塗りを「不正解（あるいは失敗）」とし、制作者の意識を特定の方向に誘導して自由な創造性を阻むというものである。

一般的に考えれば、塗り絵の輪郭線の存在が作品表現にあたって制作者の意識に「何らかの影響」を与えることは自明の結果だといえる。それはあらゆる作品表現において画材や用具などの制作環境から受ける影響と本質的に同義であり、影響の存在そのものを議論することにさしたる意味はない。問題にすべきは、その影響が真に制作者の創造性を阻害するものとなっているかどうかの見極めであろう。

小田〔注16〕は、塗り絵が創造性を阻害するとしたローウェンフェルドの主張に対して、心理学者のガードナーが指摘した「物の輪郭を与えることで想像力をかき立て自分の世界を広げる子どもがいる」という内容を紹介している。これは、塗り絵の輪郭線が制作者に対してポジティブな影響を与えた一事例と見ることができるだろう。また、初田〔注12〕は、絵の輪郭があらかじめ与えられていることによる効果をプラス／マイナスの両側面から網羅的に記述している。マイナスの効果として「自由にかけない／輪郭線に頼って描く様になる／自分でオリジナルな絵を描かなくなる」などを挙げ、これらが行き着く先に「創造性の阻害がある」とする一方、プラスの効果として「色の学習に集中できる／抵抗感が少なく手軽に取り組みやすい／絵柄の工夫によって意欲を高められる」などを挙げ、これらから「塗り絵によって培われる

創造性がある」とも述べている。この初田の主張を踏まえれば、塗り絵の彩色方式自体が備える影響には正負両方の性質があり、その影響がマイナス効果とならないようにするには「塗り絵をどのような教育目的で、どのような方法で活用するか」といった教育メソッドにこそ注意を払う必要があるのではないかと考えられる。

3.2. 描かれた「図案の内容」が与える影響

塗り絵に描かれる「図案の内容」は、一般的に具象物をモチーフにしたものが多い。小田〔注17〕は1998年に当時市場に流通していた塗り絵149種の内容を分類し、そのうち56%がキャラクター塗り絵であったと報告している。明治・大正時代の塗り絵の画像を資料として取りまとめた『おもちゃ博物館 14 うつし絵・着せかえ・ぬり絵』〔注3〕を見ても、登場するのは全て具象的図案である。

具象的図案は、その内容によっては制作者に特定の色を強く連想させ、彩色にあたって色の選択の多様性を排除してしまう可能性がある。その結果、「具象物の実際の色にもとづいた塗りを正解、そうでない塗りを不正解とし、制作者の意識を特定の方向に誘導して自由な創造性を阻む」といった塗り絵のマイナス効果を生じさせかねない。こうした性質を踏まえ、塗り絵を教育的取り組みとして用いる際には、図案の内容について考慮し、特定の色を強く連想させることのない図案を採用することが望ましいと考えられる。

以上のような条件を満たす塗り絵の一例として、アート・セラピスト兼カウンセラーのスザンヌ・F・フィンチャーが世に広めたマンダラ塗り絵（図1）がある〔注18〕。マンダラ塗り絵の、他の塗り絵と異なる特徴として、

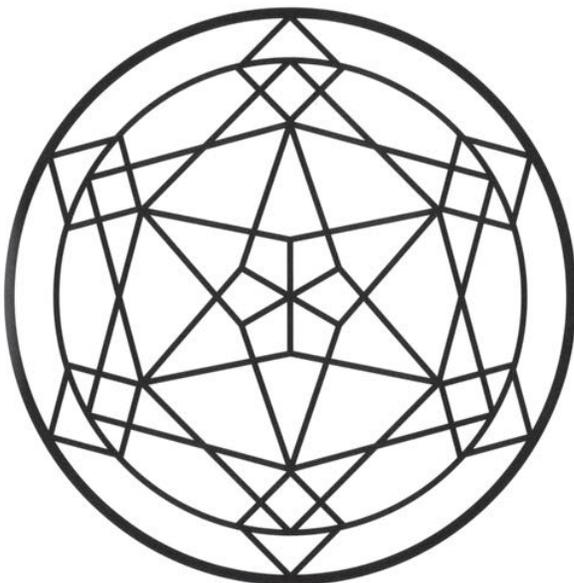


図1. マンダラ塗り絵

図案が幾何学的な図形構成による抽象柄であることが挙げられる。また、その抽象柄が対称的に描かれていることや、円の中に収まる形で描かれていることなども、マンダラ塗り絵の形態が備える固有の性質と言えるだろう。抽象柄は塗り絵の制作者に特定のイメージを強要することがないため、それぞれの制作者が自由な発想で彩色を楽しむことが可能となっている。

4. デザイン系高等教育における塗り絵の活用

塗り絵と教育をテーマに取り組みされてきたこれまでの研究を見ると、いずれも教育対象として幼児もしくは児童を想定した内容となっている。本稿で紹介した塗り絵に対する否定的見解も、ほぼ全てが「幼児や児童に塗り絵を与えた場合」という前提条件にもとづいた主張となっている。このように、幼児保育や初等教育における塗り絵の教育効果については幾らかの知見が蓄積されているものの、高等教育等における塗り絵の活用について知見が深められた形跡は見られない。本章では、デザイン系高等教育機関に在籍して色彩教育の現場に携わる筆者の見解にもとづき、高等教育における塗り絵の活用について考察を行いたい。

美術分野が作品表現としての独自性の追求に重点を置いているのに対して、デザイン分野では社会ニーズやクライアントの要望などといったクリエイティブの前提条件を踏まえて制作に取り組む能力が求められる。一例として、プロダクトや空間を対象としたカラープランニングを例に挙げると、業務遂行にあたり、定められた形状のアイテムや空間に対して適切な配色を計画していく必要がある。これは、ある意味で「塗り絵的な環境」での色彩計画能力が求められていると言い換えることができるだろう。

塗り絵の輪郭線という性質を「前提条件（あるいは仕様）」として踏まえ、その前提条件に則った上で創造性や表現力を発揮する課題として取り組むと捉えれば、塗り絵はデザイン系高等教育における教材として高い親和性を有しているのではないかと考えられる。

このような仮説にもとづき、筆者は2019年度より自身が担当する色彩学の授業において、マンダラ塗り絵を題材に用いた配色演習課題を実施している。2019年度の配色演習実施後、提出された作品表現について確認したところ、作品表現として一定程度の表現の自由度が担保されていることがわかった。また学生に対してアンケート調査を実施したところ、制作時の楽しさや作品の出来への満足度などの複数の項目について良好な反応が得られ、学生の学修意欲向上の観点で有用性が示唆される結果と

なった。これらの調査結果の詳細については、別報〔注19〕を参照いただきたい。

5. おわりに

本稿では塗り絵の教育的価値について、既往研究および文献調査にもとづく歴史的推移を概観すると共に、その見解を分析した。また教育場面における塗り絵の新たな活用について考察を行い、塗り絵がデザイン系高等教育における教材として高い親和性を有している可能性を示した。今後も塗り絵と色彩教育の関係について知見を深めるべく、継続的に研究に取り組んでいきたい。

【謝辞】

本研究の一部は、一般財団法人越山科学技術振興財団および公益財団法人小川科学技術財団の研究助成を受けて実施されました。研究活動へのご支援に心より感謝申し上げます。

【注・参考文献】

- 出版年鑑編集部編：出版年鑑 2007 (1) 資料・名簿，出版ニュース社，2007
- ほんのひきだし「大人の塗り絵」にハイレベルな作品も続々登場！昨年夏以降、売上が3倍以上に急成長と大ブームに」，<https://hon-hikidashi.jp/enjoy/9830/> (2021年1月4日確認)
- 多田敏捷（編）：おもちゃ博物館 14 うつし絵・着せかえ・ぬり絵，京都書院，1992
- 辻泰秀：美術教育における学習指導の内容と方法の変遷 (1)，教師教育研究 (10)，191-198，2014
- 蜂谷昌之：明治期における図画教育に関する研究 一 博労小学校所蔵資料及び図画作品の分析から一，美術教育学研究 50(1)，297-304，2018
- 根山梓：北海道における自由画教育運動前の図画教育 (1) 札幌区東北尋常小学校訓導山口庸矩の論文，美術教育学：美術科教育学会誌 39(0)，223-236，2018
- 根山梓：北海道における自由画教育運動前の図画教育 (2) 室蘭成徳尋常高等小学校訓導久慈治安の論文，美術教育学：美術科教育学会誌 40(0)，309-322，2019
- 福田 隆真：美術科教育の方法に関する一考察 自由画教育と構成教育，教育方法学研究 15(0)，135-142，1990
- 金子マサ，山本紀久雄：ぬりえ文化，小学館，2005
- 外山卯三郎：児童画の指導，暁教育図書出版，1957
- 那須田茂：こどもの美術教育，造形社，1966
- 初田隆：「ぬり絵」の研究，美術教育学 美術科教育学会誌 28(0)，321-333，2007
- 小田久美子：日本国内の塗り絵の出版状況と幼児教育への浸透，美術教育 1998(277)，60-65，1998
- 鈴木純子：表現領域の絵画教育とぬり絵，実学教育研究 3，11-24，2010
- 鈴木純子：表現領域におけるぬり絵に対する否定的見解の検討，実学教育研究 (臨増)，9-24，2012
- 小田久美子：子どもの生活の中にある塗り絵の種類と保護者の塗り絵に対する意識，美術教育 1999(279)，22-28，1999
- 小田久美子：幼児の美術教育と塗り絵との接点，美術教育 2000(281)，8-14，2000
- マンダラ塗り絵のルーツは、心理学者のカール・グスタフ・ユングが患者の精神回復のために考案した治療としての心理療法にある。フィンチャーは著書『マンダラ塗り絵』（春秋社，2005）で、塗り絵への取り組みを通して精神的リラクゼーション効果や集中効果の獲得を期待するものであると説明している。
- 小川直茂，藤田篤：色彩教育における「マンダラぬりえ」の活用に関する分析・考察，日本保育学会 第73回大会 概要集，2151-2152，2020

(提出日 令和3年1月5日)